柄眼目オナジマイマイ科

ササミケマイマイ

青森県：ＬＰ（八甲田山）
環境庁：情報不足

大八木昭撮影

殻径9㎜前後のマイマイで殻の表面に鱗状のけば立ちがある仲間なのでケマイマイとよんでいます。長い触角のあるところが頭部で、そこに頭瘤というこぶがめだちます。岩手県の国見温泉のササのはえたところから発見されたのでこのような名になっています。その後、福島県、茨城県でも確認され、県内では八甲田山中で確認されました。広葉樹林内の笹やぶで風倒木などがあるところに見られます。生息個体数は多いとは思われません。

大八木

柄眼目オナジマイマイ科

ミチノクマイマイ

青森県：Ｃ
環境庁：該当なし

大八木昭撮影

殻のとがった方を上にして殻口を見たとき、殻口が左側にくるのが左巻きになります。殻径24㎜前後の左巻きのマイマイで、白地で無帯のものと茶褐色の色帯があるものとがあります。ヒダリマキマイマイ種群は近畿東部より北に分布していますが、そのなかでも西北端に生息する種です。秋田県と本県の日本海側に分布しています。内陸部にはあまり入りこまないと思われていますが、岩木山や梵珠山でも点々と見つかっています。

大八木

異歯目カワシンジュガイ科

カワシンジュガイ

青森県：C
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

大八木昭撮影

本県では川内川の支流などでやや砂地の川底に、突っ立った状態で生息する殻長80㎜前後の二枚貝です。普通の個体には真珠はできません。幼生はマス科魚類に付着して生活し分布を広げます。現在、川内ダムにより、水生生物の上流と下流のゆききができなくなっており、さらにダム湖に在来種でない魚類等が放流されたりすれば、水生生物相が変化して、本種の生息に影響が現れる心配があります。

大八木

クモ目ミズグモ科

ミズグモ

青森県：D
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

京都府産飼育個体　桝元敏也撮影

水草の間に空気の部屋を作って水中生活をする唯一のクモで、体長は10㎜前後、頭胸部が暗褐色から黒色をしています。ヨーロッパからアジアの冷涼な地域の池沼に広く分布する種類ですが、個体数は多くありません。本県では、1977年9月に車力村の沼で初めて発見されました。しかし、その後は記録がなく現在の生息状況は不明です。ミズゴケのある池沼で、タヌキモやマツモなどの沈水植物が繁茂していることが生息の条件です。

大　高

ホウネンエビ目

キタホウネンエビ

青森県：A
環境庁：該当なし

大八木昭撮影

エビという名がついていますが、いわゆる海老（えび）ではありません。春になって雪解け水が溜まったところに発生する20㎜ぐらいになる大型プランクトンのようなものです。背泳ぎでゆっくりと泳ぎます。水溜まりは初夏までに干上がって、成体は死んでしまいます。卵が残って休眠し、次の雪解け水が溜まるまでは発生しません。ですから、ある程度の積雪量がないと生きてゆけません。分布地はいまのところ、北海道石狩平野とむつ市だけです。

大八木

エビ目アメリカザリガニ科

ニホンザリガニ

青森県：B
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

楳辻智之撮影

北海道と本州北部に生息する日本固有のザリガニです。県内では、かつて太平洋側南部と白神山地を除くほぼ全県に分布していましたが、都市化や水質の悪化によって生息地は近年大幅に減少しています。生息場所は、水温が低く水のきれいな小河川や湧水域に限られます。ふ化してから最初の産卵までに3年から5年もかかるうえに、卵の数もとても少ないという特徴があります。いったん個体数が減少するとなかなか回復しないので、乱獲もつつしまなければなりません。

大　高

エビ目サワガニ科

サワガニ

青森県：C
環境庁：該当なし

大八木昭撮影

一生を淡水で過ごすカニで、本県が分布の北限です。主に礫（れき）や小石の多い清流に生息しています。県内のほぼ全域に分布していますが、下北半島ではまれです。県内での密度は南西日本に比べるともともと少ないうえに、近年は都市化や水質の悪化によってさらに減少しています。本県の河川にはサワガニのほかにモクズガニもよく見られます．モクズガニは産卵時に海に下る種類で、はさみに毛が密生していることでサワガニと区別できます。

大　高

触手動物門アユミコケムシ科

アユミコケムシ

青森県：D
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

群馬県産　　織田秀実撮影

コケムシの仲間は、サンゴと同じように小さな虫体が多数集まって群体を作り、ふつう水中の石や木の表面を覆うように固着しています。一方、アユミコケムシは群体自体がゆっくりと移動する珍しい種類です。群体は長さが数cmから十数cmで細長い形をしています。北半球の寒冷地に広く分布し、国内では本州中部以北で見つかっています。本県からは、1930年代の終わりに狄ヶ舘（えぞがたて）溜池（森田村）と小川原湖から発見されました。しかし、その後の記録はなく、現在その生息はあやぶまれています。

大　高